

## はじめに ～暴力行為の低年齢化～

文科省は毎年、児童生徒の問題行動に関する調査結果を公表しています。この調査では、児童生徒の暴力行為、いじめ、出席停止、不登校、自殺等を扱っていますが、今年度の調査結果からは、小学校における暴力行為（器物損壊、対教師、対子ども）の増加傾向に歯止めがかからず、低学年ほど増加率の高いことが明らかになりました。（10年前と比較して小6年：1.9倍、小5年：3.0倍、小4年：3.8倍、小3年：4.2倍、小2年：4.3倍、小1年：5.0倍）わずか7歳の子どものまですら暴力行為をとるようになったのですから、今後、学校の抱える新たな課題として危機感をもって対応していく必要が出てきます。

私は1980年代の“荒れる中学校”を経験しています。当時を少し振り返ってみますと長ラン、ボンタン、茶髪、ロングスカート等といった学校規則への抵抗や、権威の象徴と見られていた教師や大人への不満、反抗として器物破損やシンナー吸引、喧嘩等に中学生のエネルギーが爆発していたことが思い出されます。ツッパリ、不良という言葉もよく耳にしましたが、ツッパリ、不良ともに端からは一目瞭然で、驚くことに、そんな彼等の多くは善悪の判断もできて当たり前で価値観を持っていました。悪いことを悪いことと知って暴れていたわけです。小学生の暴力行為となると、この辺りに食い違いがあるような気がしています。暴力行為の低年齢化現象は、子どもたちを取り巻く生活環境、教育環境における複雑な背景・要因が絡み合って起きていて、心にため込んだ感情が善悪判断以前の問題で、意思を持たないままマイナスとして表出した結果での行為が多いように思います。もしそうだとすると、低学年の暴力行為は当たり前として定着しそうで根の深さを感じます。私たちは暴力の低年齢化を指をくわえて見ているだけでは寂しい限りです。そのための対策を考えて、何らかの解消に向けた行動をとりたいものです。

今、学校では若い教師が増えており、こうした低年齢化現象は、教師の指導力不足に起因して、子どもたちが良好な人間関係を築けないでいる結果かもしれません。生活の利便性と安易性が相まって、子どもたちから耐性や規範意識を奪っていることが問題なのかもしれません。また社会構造の変化が、家庭や地域社会の教育力の低下を生み出していることによるものかもしれません。

ですから学校では、全員の先生が全児童生徒の担任意識のもとに、協働精神で智慧を出し工夫をして楽しい学校づくり、楽しい授業づくりを目指しましょう。子どもたちには考えて想像することを大切にして、自らいろんなことを体験したり、いろんなことに挑戦できるようにさせたいものです。家庭や地域が大好きになる子どもたちの心を育てましょう。そして学校、家庭、地域は連携して支え合い、助け合う協働こそが目の前の子どもたちに安心感を与え、伸び伸びと健やかな成長を可能にしていくのだと思います。

終わりに、青少年健全育成事業にご尽力いただいております皆様方に深く感謝し、本事業の更なる発展を衷心よりご祈念申し上げます。

平成28年2月

蒲郡市教育長 廣 中 達 憲

# も く じ

は じ め に

I	平成 27 年度 青少年健全育成地域活動推進事業	1
II	平成 27 年度 青少年健全育成協議会・地域ふれあい活動	2
1	大塚地区	3
2	三谷地区	7
3	蒲郡地区	11
4	中部地区	16
5	塩津地区	20
6	形原地区	27
7	西浦地区	35
	○健全育成協議会並びにふれあい活動のまとめ	40
III	補導員活動	41
IV	平成 27 年度 地域安全・青少年健全育成市民大会	42
	○大会宣言	43
	○小学生・中学生・高校生の意見発表	44
V	蒲郡市子ども・若者支援ネットワーク協議会の取組	57
VI	スマートフォン・携帯電話等の利用に関するアンケート調査結果	58
	ならびに青少年問題協議会での意見交換会の報告	68

お わ り に